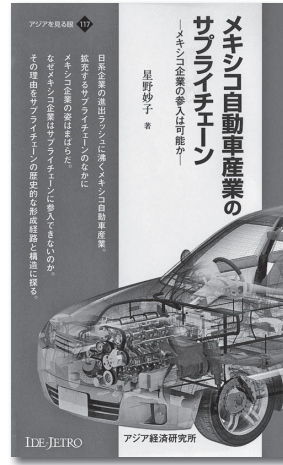


星野妙子著

メキシコ自動車産業のサプライチェーン

—メキシコ企業の参入は可能か—

アジアを見る眼No.117、アジア経済研究所



一九八〇年代を境に世界の自動車産業は二つの点で大きく変貌をとげた。ひとつは日本的生産方式の浸透、もうひとつは一単位からグローバルへの生産ネットワークの転換である。

メキシコがグローバル生産ネットワークの一角に組み込まれたのは一九八〇年代であり、以降、メキシコ自動車産業はめざましい成長を遂げた。

グローバル生産ネットワークの一角に組み込まれることで発展途上国が期待できる利益に、先進国企業との取引関係を通じて地元企業の能力向上がある。本書では、これに関わる二つの問いに答えることを試みている。第一に成長めざましい自動車産業がメキシコ企業の能力向上の場となっているのかという問いである。結論を先どりすれば、能力向上の場となっているのは言い難い。そこで次にくるのが、なぜ能力向上の場となっていないのかという問いである。

著者がこれらの問いが重要だと考え

るのは、次のような理由による。

一九九一年の対内外国直接投資の規制緩和以降、メキシコで外国企業は存在感を大きく増した。しかし最

新センサスによれば、企業のなかで外国企業は数の上で〇・一%とほんの握りに過ぎない。問題はこの〇・一%が就業者の八・四%、付加価値生産額の二〇・一%をも占めることである。これらの数字が示唆するのは、外国企業とメキシコ企業の間が存在する圧倒的な規模と生産性の格差である。この格差をいかに縮めるかは、メキシコ経済がかかえる大きな課題といえる。格差を縮める方策のひとつといえるのが、メキシコ企業がグローバル生産ネットワークに参加し、それを新しい知識の学習と能力向上の機会とすることである。

「知識」は形式知と暗黙知の二つの部分から成る。知識を移転する場合、形式知はマニュアルや数値化された情報による移転が可能だが、形式知と

もに暗黙知も移転しなければ、知識はうまく利用できない。暗黙知の移転には、その特性のために、人の接触を介した学習が必要とされる。グローバル生産ネットワークに参加することは、マニュアルやコードでは伝わらない知識を、人の緊密な接触を介して学習する貴重な機会であるといえる。

自動車産業では、そのような貴重な機会がメキシコ企業の能力向上に生かされているとはいえない。その原因の根源は、メキシコが自動車のグローバル生産ネットワークに組み込まれた歴史的経路と、隣国米国の存在にあるというのが著者の見方である。そのエッセンスは次のとおりである。

メキシコが自動車のグローバル生産ネットワークに組み込まれるに際しては、二つのダイナミズムが働いた。ひとつはメキシコ発の成長戦略転換のダイナミズムである。一九八二年にメキシコは対外債務の返済不能に陥った。それを契機に、政府はそれまで掲げていた輸入代替工業化から輸出工業化へと成長戦略を転換した。その際に転換のモデルケースとしたのが自動車産業であった。もうひとつは米国発の自動車産業再編のダイナミズムである。一九八〇年代以降、米国の自動車産業では日系企業の進出により企業間競争が激化した。競争力強化の必要から米国の完成車メーカーが採用したが、メキシコを米国向け小型車生産の拠点と

する戦略である。二つのダイナミズムが合体することで、米国とメキシコをまたぐ生産ネットワークが形成されるが、それはメキシコ企業にとって排他的で敷居の高いものとなった。なぜ排他的かといえば、米国にあるネットワークをメキシコに移植する形で生産ネットワークの形成が進んだためである。なぜ敷居が高いかといえば、米墨をまたぐ生産ネットワークの存在により、新規参入には先進国企業並みの高い能力を要求されるようになったためである。グローバル生産ネットワークに組み込まれたことで地元企業の淘汰と参入条件の高度化が起きたのは、輸入代替工業化により自前の自動車産業を育成した途上国の多くが共に経験したことである。メキシコに特徴的なのは、米墨をまたぐ生産ネットワークの構築の経路と、隣国米国の存在により、メキシコ企業の淘汰と参入条件の高度化がよりドラスティックに進んだことにある。以上の内容を先行研究の成果と、著者によるメキシコでの日系自動車関連企業への聞き取り調査によりながら論じている。

本書は、メキシコおよびグローバル生産ネットワークへの参加による途上国企業の能力構築の可能性に関心を寄せる読者に向けて書かれている。

(ほしの たえこ／アジア経済研究所 ラテンアメリカ研究グループ)